# 日替わり３５℃！！

天地　袋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日替わり３５℃！！

【Ｎコード】
Ｎ５４６３Ｃ

【作者名】
天地　袋

【あらすじ】
いつもの毎日、いつもの道、いつものように教室の扉を開けるとそこは…。超イミフ劣悪ファンタジー！！（息抜き、暇なときに…

## 第0話　プロローグ（前書き）

更新が信じられないくらいに、遅い場合がございます。
本当に信じられないので、信じられないと思って下さい。

# 第0話　プロローグ

トンネルを抜けたらだとか、森に迷い込んだりだとか、路地裏に入ってみたらだとか、穴に落ちたらだとか、いわゆる不思議の世界に繋がる場所は数多くある。

といっても「はい、そうですか」と、鵜呑みにするほど単純でもなかったし、純粋でもなかった。

しかし、最近、俺は不思議の世界を信じるようになってきている。なぜなら、俺が不思議の世界に迷い込んでしまったからだ！

俺のケースでは、そうそういつもと違った行動に出た分けでもないし、きっかけなんてたいしたことじゃない。
しいて言うならば、教室の扉を開けたことだ。

教室の扉を開けると、そこは不思議の世界だったのだ。

人間の記憶というのは曖昧で、何処が始まりだったとか、どんな事が起きたのか、逐一覚えているわけではない。
色々ありすぎて、記憶の処理が追いつかないのだ。

という分けで、俺の記憶は三つ目の不思議から始まる。

# 第1話　The Third Mystery 前編

俺のクラスには既に、天使と悪魔が存在していた。
いきなりだが、彼らは数日前に転入してきたのだ。今思えば、この二人から、天使だの悪魔だのと、自己紹介を受けていた気もするが、少し頭の痛い連中くらいにしか思って居なかった。

そして、当然この2人は仲が悪い。
そんな事は、大して問題ではない。仲が悪い連中だって世界には五万といるんだ。
俺は、別に気にすることも無く、学園生活をそれなりに楽しんでいた。

今日もなんら意味も感じず、教室の扉を開けた。
少しおかしな事もあるようだが、俺の目にはそんなもの映らない位だ。
天使と名乗る男と、悪魔と名乗る女が転入してきただけである。

ノソノソと窓側にある、自分の席に移動すると壁に日本刀を立てかけた。
お家柄というか、そのような事情で俺は、国から帯刀を許可されていた。帯刀許可は、確かに大多数に与えられる権限ではないが、恐ろしく珍しいわけではない。

十五歳で元服する時に刀をもらうのだが、その名前が自分の本名になる。
刀には打った人が、名前を付ける。俺のは『黒蝶雪村（こくちょうゆきむら）』という名らしい。まだ、ましな方だ、友達なんて『太郎』なんてのが付いていたのを見た。

窓の外からグランドを見ると、不規則に何かが多数飛んでいる。
「ぼんとんぼか・・・。」
俺は、ポツリと言った。

「アキアカネだろ？」
前から声がして、振り向くとそこには、大辻慎太郎（おおつじしんたろう）がいた。前の席の男で、最近やたらと話してくるのだ。

「あぁ、そうなの？」
俺は大してどうでも良さそうに、あくびを一つした。

スッと視線を窓の外に戻すと、大量にいたとんぼは全て消えていた。

ガラガラ・・・。
丁度、扉が開いて担任の枕谷がはいってきたのを、音で確認する。

ぼーっと、した気候が全身を包んで、もう一つあくびをした。
季節のせいか、薄い雲がマーガリンみたいに空に塗られている。

「あ～、転入生が来たから、皆に紹介しておくな」
担任、枕谷の言葉だ。

あんだって？
俺が振り向くと、

そこには女神が立っていた。
そんな、古風な喩えはどうかと思うが、どう見ても女神だ。
精錬された顔立ちに、抜群のプロポーション。これで、女神じゃな

いなら、何だと言うんだ？

「あ～、じゃ、自己紹介して」

俺が勝手に作り上げた、幻想的な空間に枕谷の言葉が割って入る。
黙れ枕谷。といいつつ、俺は女神の言葉を待った。

女神の口が開かれた。
「皆さんこんにちは。女神です。」

俺は、その場に氷ついた。

ぽろ・・・。食べていたドッボがおちる。

あぁ、確かに君は女神だ。だが其れは見た目でな。まさか、本当に自分が女神だと言っているんじゃないだろ？

「あ～、という訳で女神空（めがみそら）さんだ。」
枕谷の補足で、無意味な緊張は緩和された。

なんだ、そういうことか、ふと教室をみると、天使男がまるで神を見るような目で見ている。
男だしな。俺もあんな目で見ていたんだろう。

対照的に、悪魔女は面白くなさそうな顔をしていた。
女だしな。何か思うことがあるんだろう。

「じゃ、女神の席は・・・」

大方の予想通り、俺とは全く別の場所を枕谷は指していた。

物語のように現実は、うまい具合に行かないのである。ちなみに補足をすると、天使、悪魔も俺とは、全然違う席である。

なんら、面白い事は無い。
誰が来ようと、何も変わらない。

「くじら？」

俺の名前が呼ばれる、くじらとは、俺の幼名である。

さっきも少し触れたが、お家柄のせいで、十五で元服する時に刀をもらうのだが、その名前が自分の本名になる。
つまり、俺の今の名前は、雪村なのだ。しかし、長い付き合いのやつは、俺を「くじら」と呼ぶから、勘弁して欲しい。

「なんだ？」

「あの子みた？あれマジすっげーの、モデルかな？」
どうやら、女神の事のようだ。

「あぁ、あれは、女神だね。」
俺も、一応のってみる。

「だろ？悪魔なんていってるけど、亜門もかなりレベル高いしこのクラスでよかったー。」

亜門とは、桐沢亜門（きりさわあもん）。転入初日に、「自分は悪魔だ」と言ったのでかなり面食らった。

「確かに、あいつもいい女だが、少し危険だろ？」

今日の俺は、何処までも素直だ。
「まぁ、俺らには関係ないさ。何も起こらないからね。」
俺はため息混じりに続けた。

「ちぇ、夢が無いなぁ」
つまらなそうに、そいつは席に戻っていった。

## 第1話　The Third Mystery 前編（後書き）

あとがき

　はい、こんにちは。天地　袋です。

この前、猫を飼いだしたんですよ～。

とかいうのが書けたら話題になるんですが、金魚も飼ってない私には相当縁遠いかなと思っとりますよ。

最後になりましたが、見てくれた方ありがとうございました。

# 第2話　The Third Mystery 中篇

１コマ目が終わると、女神の席には人が群がっていた。
確かに、お近づきになりたい気もするが、この人ごみの中に飛び込むほど俺はチャレンジャーではない。
教室移動もなく、全く動く気の無い俺は机に被さる様に倒れた。
窓の外は、夏と秋を混ぜたような空気のせいか。
それとも、俺の体を包む倦怠感のせいか。
全く、やる気がおきない。
そのまま、ぐるんと、首を教室側に向けると目の前に亜門の顔があった。
「・・・・・わぁ！？」
俺は、教室中に響く声をあげた。
数人が俺のほうを見たが、女神のほうがお気に入りらしくまた皆、興味なさそうに視線をはずした。
「何だよ。いきなり、目の前に現れて。」
「まずいわね・・・。」
亜門は、指を口に持ってきながら、ポツリといった。
「なんだ？いったい何がまずいんだ？」
何も答えない亜門を無視して、俺は続けた。

「あぁ、女神は確かに綺麗だ。確実に、お前とファンが二分するな。」

「違う・・・。」

どうやら、俺の発言は、的を射ていないようだ。

「今までは、勢力が均等に二分されていたためどちらとも下手に動けなかったけど、こうなったしまった今、明らかにこちらの戦力不足ね。」

また始まった。こいつの妄想もいいかげんにして欲しいものである。

「で？その戦力不足と、俺へのボヤキがどう繋がってるんだ？」

亜門は、まじまじと俺の顔を見た後に口を開いた。

「貴方の力を貸して。」

「はぁ、具体的には何を？」

「私の見方になってほしいの。貴方は、刀の携帯が許可された人間。それなりに、力があるはず。」

「おぃ、待て待て。この、帯刀はなぁ。威厳なだけで、実用性はないの。有る事もあるけど、基本ないんだよ。」

「戦力があちらに傾いている状況では、いつ戦いになるか分からない。もし、そんなことが起これば、この学校の生徒も無事で居られなくなるわ。」

ほう、それは困る。

ここには、死んで欲しくないやつも大量にいる。
しかし、死ぬ事は無いだろう、なぜなら、そんなことは、起こりえないからだ。

「お前・・・」
丁度、チャイムが鳴って俺の話は、打ち切られた。

２コマ目が終わって、３コマ目は体育だ。しかし、教室で自習に変更になったらしい。

机に突っ伏して、横を見ると、目の前に聖の顔があった。
宗方聖（むなかたひじり）、分かりやすく言うと天使男だ。

「・・・わぁ！？」
俺は、二度目の声を上げた。

「何だよ。いきなり、目の前に現れて。」

「君にお願いがあるんです。」
宗方は、目の細い、貼り付けたような笑顔で言ってきた。

「ほう、なんだ？」

「あちらはどうか分からないけど、僕たちは話し合いで決着を付けたいとおもっています」

「ほう、そうですか。」
興味なさげに、遠くを見ると、こっちの様子を亜門が見ていた。

「今、限りなくいい方向に事が運んでいます。ですから、君に乱して欲しくないんです。」

「俺は、何もしていないがな」
まるで、言いがかりだ。何のことだろうか。

「とにかく、今度の件は、手出し無用でお願いしますよ」
終始、笑顔で釘を刺されてしまった。

亜門が遠くで舌打ちをしているようだった。

## 第2話　The Third Mystery 中篇（後書き）

はい、こんにちは。天地　袋です。
最近知ったんですが、ブルガリア料理って本当に普段の食事にもヨーグルト混ぜるんだね。
最後になりましたが、読んでくださった方ありがとうございました。

# 第3話　The Third Mystery 後編

うららかな昼下がり、今日もドッボがうまい。
ドッボというのは、スティック状のお菓子で、俺が好んで食している。
最近の熱気で、中のチョコはドロドロだがコレばかりは仕方がないだろう。
俺が2袋目のドッポを開けた時、急に枕谷が入ってきた。
「あぁ、殺人事件が起きた」
また、急だな。
「先生、何年生ですか？」
クラスの女の子の言葉だ。
「あ、いや、学校じゃない。この近辺でな、学校に犯人が潜む可能性があって危険だから、お前ら今から帰れ。なるべく大人数でなぁ」
「お～、くじら。帰ろうぜ。」
大辻がクルっとこちらを向いた。
※　※　※
「しっかし殺人事件とか急だよな～」
当たり前だ。今日日（きょうび）、予告殺人があるわけないだろ。お前の頭は小説か。

と、心の中で悪態を付きつつポケットを探った。

「ってあれ？チャリの鍵が無い？悪い先帰っててくれ。後で、追いかけるから」

本当に、どこにも鍵がない。

「分かった、じゃ、帰っとくわ～。」

さらばだ。大辻。

しかし、鍵を無くすなんて付いてないな。１日中机から立たなかったのに無くすなんてな。

事件のせいか、まだ１時過ぎだというのに生徒は１人も見当たらない。

静まり返った廊下を歩き、教室の扉を開けた。

「・・・わぁ！？」

俺は再び驚いた。窓際に亜門が立っていたのだ。

そこは、まごう事なき俺の席の前だ。

「おい、殺人事件だぞ。早く帰れって・・・。」

言いながら、机の周辺を探してみる。

「鍵…探してるの？」

「あぁ、そうなんだ。てか、何でお前知って…。」

言いかけた、俺の前にチャリの鍵がぶら下がっていた。

いや、亜門が顔の前にぶら下げていた。

「あ、悪いな。ここに落ちてたか？」

亜門は質問には答えず
「考えはまとまった？」

「あぁ、俺は猛烈に家に帰ろうと考えたぞ。」

重い沈黙だ。
俺のギャグセンスは亜門に届かず空を斬るだけに飽き足らず、気分を害してしまったのか？

誤ろうと思った瞬間、教室の扉が開いた。

「お楽しみ中申し訳ないんですがねぇ。君たち人質になってくれない～？」

俺はすぐに理解した。

殺人犯だ。こいつの顔を見ただけでわかる。
こいつは殺人犯の顔をしている。

まったく急だ。今日と言う日は、ここ数日は急すぎる。
非日常的なことばかりだ。３回目は殺人犯だな。

俺は自然に亜門を後ろに庇うと、刀を利き手に持ち替えた。

## 第3話　The Third Mystery 後編（後書き）

はい、こんにちは。天地　袋です。
最近、唐揚げの食べすぎで、唐揚げが苦手になりました。
最後になりましたが、読んでくださった方、ありがとうございました。

## 第４話　女神は放課後に笑う　前編

何も変わらない日々に嫌気はささなかった。
何も変わらないのが普通だと思っていたし、おれ自身も刀の携帯許可以外はいたって普通の高校生だったからだ。

※　※　※

男は、俺が刀の携帯許可を持つ人間だと知ると少し狼狽したが、向こうも今更後には引けないようだ。
こちらに包丁という、絵に描いたような現代の殺人犯の凶器を向けている。
包丁と言っても、これが刺身包丁というのだろうか、刃渡りは通常の包丁の比ではない。

「雪村君…。私を守ってみてね…」
亜門だ。この状況が分かっていないのか、刀を持っているこちら側が有利だと思っているのか落ち着いたものだ。

ぜぇぜぇと、犯人の呼吸が荒くなっている。

そろそろ来るか？と思った刹那。犯人が、包丁を前に突進してきた。
避ければ亜門が危ない。刀で包丁を弾くと、犯人の腹に一発蹴りをお見舞いした。
犯人は、派手に机を吹き飛ばしながら横転したが、すぐに体制を立て直したようだ。

密着した状態だと、包丁の方が有利だ。常に距離をとりつつやらなければならない。

「ねぇ、雪村君…。」

この、忙しいときに亜門が話しかけてきた。

「何だよ…。今じゃないとダメか…？」

「さっきから、気になったんだけど…。どうして刀、抜かないの？」

こんな時に見方〔？〕の方から確信を付かれるとはな。

「だから、言っただろ？この刀は威厳なだけで、実用性はないの。俺の許可されてるのは帯刀までで、抜刀は許可されてないんだよ！」

刀の携帯許可にはランクがあり、俺は最下級の帯刀許可までしか許可が下りていないのだ。

もし、ここで抜刀しようものならば、一瞬にして法を犯し、この殺人犯と仲良くお縄につくだろう。

俺は高らかに宣言したその時、嫌な気がした。

「この野郎ビビらしやがって。」

犯人は口元に不適な笑みを浮かべている。

無理もない、向こうは殺傷能力抜群！超強力刺身包丁！

一方こちらは、鞘に入った刀。早い話鈍器！殺傷能力金属バット以下！

もう少し考えればよかったな…。
さっき、机ごと吹き飛ばした事により、亜門の逃げ道が絶たれてしまっている。

逃がすことが出来ないのなら、コノ男ヲ倒サナケレバ。

背中に流れる汗の一筋、外を飛ぶ蜻蛉（とんぼ）の羽音、犯人の息遣いまでもが鮮明に聞こえる。
犯人の息遣いが変わった。

来る。

倒すためには、こちらから攻める必要がある。
今度は犯人が初動を起こす一拍前に、地面を蹴った。

## 第４話　女神は放課後に笑う　前編（後書き）

はい、こんにちは。天地　袋です。
すごい綺麗なビンを拾いました。小さいワインの空ビンです。
拾ったと言っても、道じゃなくて、家の中でです。
だから、別に汚くないんですよ。
最後になりましたが、読んでいただいた方ありがとうございました。

## 第5話　安っぽい影絵　初話（前書き）

今回の話は、前回の続きではありませんのでお気をつけ下さいませ。

## 第5話　安っぽい影絵　初話

凄まじい衝撃で目が覚めた。何かがお腹の上に乗っている。
が、その犯人はすぐ分かった。

「重いぞ、漆。今にも死にそうだ。」

相良（さがらうるし）漆。俺の妹だ。

「お兄ちゃん。早くしないと学校遅れるよ！」

慌てて時計を見るが、そう焦る必要もない時間だ。
よく見ると妹は制服に着替えている。
ん？なんで？

「漆。なんで小学校の制服？」

「もう、漆も今日から小学生だよ！お兄ちゃんも小学生だから、一緒だね～。」

なんと、漆が小学生にあがったと言うことは、今日で俺の春休みが終わったと言うことだ。

小学生の朝は早い。高校生の兄貴がまだ寝てるのに、なんで俺は起きねばならんのだ。

「おはよう。くじら。」

台所に行くと、親父が新聞を読んでいた。

「おはようございます。」

そこで珍しく、兄貴が居ることに気づいた。

「あれ？蓮兄ちゃん、今日は早いね～。」

相良（さがらはす）蓮。俺の兄貴だ。

あ、元服したから相良蛍雪（さがらけいせつ）になったんだっけ？

「ん？くじらか、今日は朝礼があるから少し早く出るんだよ」

兄貴は、テレビを消しながら答えた。

「じゃ、僕はそろそろ出かけるね。」

「気をつけてな。」

「いってらっしゃい。」

親父と、声がシンクロしてしまった。

玄関に行ったはずの兄貴が、急いで戻ってきた。

「危ない、『蛍雪』忘れるところでした。」

どうやら、日本刀を忘れたようだ。

親父は苦笑いしていたが、兄貴笑いながら俺の方を向いてチロッっと舌をだした。

奥の部屋から出てきた母さんが

「蛍雪もう出たかしら？」

と、親父に聞いているのが見えた。

何も変わることのない毎日。
何も変わらないと思ってたんだ。
ショウガクセイノ、ボクハ。

## 第5話　安っぽい影絵　初話（後書き）

はい、こんにちは。天地　袋です。
あぁ、部屋が汚い…。
最後になりましたが、読んでくださった方ありがとうございました。

## 第6話　女神は放課後に笑う　中編

俺は突進の勢いに任せて、刀〔収刀状態〕を振った。

犯人は、俺の方から向かってきたことに狼狽したが、体を捻ってかわした。

すかさず俺は、避けた方向に刀を振るったが手応えがない。

しゃがむようにして避けた犯人が、俺の横腹を狙っているのが見えた。

「うおおおおぉぉぉぉ！！！」

俺は絶叫しながら、犯人を蹴り上げた。包丁の刃が俺の服と皮膚を掠(かす)めた。

ヤバイ、これマジだわ。

間髪を入れず、地面に転がる犯人を突こうとした刹那、下腹部に痛みを覚えると同時に後ろへ吹き飛ばされた。

もう少し、”下腹部の下腹部”を蹴られていたら、女性には分からない信じられない事態に陥っていたことだろう。

正直、刃物を相手に戦うのがここまで精神力と集中力がいるとは思っても見なかった。

今まで気づかなかったが、俺は自分でも驚くほど汗を掻いている。

息も切れ切れだ。

犯人の方も、だいぶ疲れがみえる。
お互いそう長くないかもしれないな。

一瞬、悪い想像をした時、また教室の扉が開いた。

目を疑ったが、それは間違いなく女神だった。
急すぎるというか、間が悪すぎるというか、てか、入る前に中の様子を確認してくれ。

来るな！と、叫ぼうとした時、女神が口を開いた。

「大丈夫？手助けがいるかな？」

先生を呼ぶ気だな。だったら、独り言か、同意を求めるかの言葉は要らないから早く行ってくれ。

犯人も人を呼ばれると思ったのか、女神の方を向いた。

くそっ！
咄嗟(とっさ)に走り出した俺の足が何かにつまずいた。

倒れながら、俺の足元に亜門の足が伸びているのが見えた。
が、亜門は女神から目を離してはいない。

派手な音を立てて、俺の体が地面に激突する。

しかも、刀の鍔(つば)が、ミゾオチにフィットしているではないか。

「うぐヴぁ・・・ギぼっ・・ゲふ・・・ごホ・・うベェ・・・。」

情けない姿でぶっ倒れている俺を一瞥すると、犯人は女神の方に向きなおった。

## 第6話　女神は放課後に笑う　中編（後書き）

はい、こんにちは。天地　袋です。
自分は、マヨネーズよりケチャップが好きです。
友人に話したら引かれました。
急に、この話を振った事に引いたそうです。
最後になりましたが、読んでいただいた方ありがとうございました。

## 第7話　女神は放課後に笑う　後編

「お譲ちゃん。ダメだよ～、人なんて呼んだら、おじさん困るでしょ～」

俺との戦いで、息が荒くなっている犯人が女神に近づく姿はどこか卑猥めいたものがある。

やめろ。お前が触れていいものじゃないんだ…。

なんとか体を起こそうとするが、相当ジャストミートしたらしく、呼吸さえもまともにできない。

亜門に文句の一つでも言ってやりたかったが、そんな場合でもないし、出来る状態でもない。

犯人の手が女神に触れようとした瞬間、女神の後ろから影が滑るように現れた。

また、予想外だが宗方聖。天使男だ。

なんてこった、ヤバイ奴等が集合してやがる。

自称天使、自称悪魔、女神、殺人犯。

まさしく、なんてこったな組み合わせだ。げふっ…。

「なんだぁ！？この糞ガキ！いっちょまえに、女の盾になろうってかぁ！？」

「お上に…。」

聖がポツリと呟いた。

「あぁ？聞こえねぇなぁ…。」

「お上に…。お上に触れようとするたぁ、どう言う了見だぁぁ！！」

普段、温和な聖が声を荒げたことに内心驚いたが、驚きが外に出ないほど俺の表情は悶絶のソレだ。

しかし、聖の普段を知らない犯人にはあまり驚きは無いらしく、いきなり包丁を突き出した。

そこからは早かった。

包丁が聖に到達するよりはるかに早く、聖の拳が犯人の腹にめり込む。

包丁を落とした犯人が床に倒れるより早く、犯人の顎（あご）に掌手を振り上げた。

犯人は宙でかるくアーチを描きながら、蛍光灯を直撃し、俺の目の前に落ちたままピクリとも動かない。

何とか、体の自由を取り戻した俺はヨロヨロと立ち上がった。

「亜門…。お前、俺、ゴホッ…、こかしたろ？」

亜門は、俺を無視して女神を直視していた。

しばらくして、少し後ろに跳ぶと窓の枠にしゃがむ様に立ち

「いずれ、ケリを付けるから…。」

といって、窓の外に飛び降りた。

「おまっ！ここ、４階っ！」

驚いて外を見たが、亜門は普通に歩いていた。

「君…。大丈夫だったかな？」

気が付くと女神が目の前に立っていた。

そういえば、これが女神との初エンカウントだったな。

「あぁ、一番のダメージは亜門…さっきの女にやられたやつだから。」

事実である。

不意に横腹が痛んだ。

そういえばここも一応やられてたな。かすり傷程度だが、切り傷だけあって中々の出血量だ。

「お～ぃ、どうしたぁ！！」

騒ぎを聞きつけて今頃、先生達がぞろぞろきやがった。

遅いよ枕谷。

「うぉっ！どうした相良！大丈夫か！？」

担任の枕谷だ。

俺が答える代わりに、聖が口を開いた。

「すみません、先生。女神さんと教室にいたら包丁持った人が現れて…。」

驚いて何もいえない俺の横で聖はつづけた。

「僕ビビっちゃって、ソコへ雪村君が来て助けてくれたんです。」
「そうか～、さすが家柄が違うなぁ。相良、偉いぞ。だが、くれぐれも無茶が過ぎんようにな。」
女神がずっと微笑んでいたから、俺は何も言えなかった。
一番丸く収まる方法を取ってくれたのかもしれない。
後処理は先生達に任せ、俺たちは帰ることにした。
「君が、相良くん？」
玄関まで言った時に女神が俺の顔を覗き込んできた。
「そう、相良雪村（さがらゆきむら）だ。よろしくな。」
その後も、大丈夫だった？とか聞かれたけど、
少し照れくさかったし、「あぁ」とか、「うん」とかしか言えなかった。
「じゃぁ、また明日ねっ。」
女神が、そう言って後ろを向いたとき、スッと聖が前に出てきた。
「いや、雪村君。災難でしたね～」
相変わらずの、貼り付けたような笑顔だ。
「まぁ、教室に殺人犯が来るとは思わないよな。」
あえて俺は、さっきの聖の嘘を追及しなかった。

「そこですよ。」

「ふぇ？」

俺は間の抜けた声をあげた。

「殺人事件があった日に、教室に殺人犯が来るなんて出来すぎてると思いませんか？」

夏とも秋ともいえない風に砂埃が舞った。

## 第7話　女神は放課後に笑う　後編（後書き）

はい、こんにちは。天地　袋です。
今日、発見してしまった、昔買った香水の底に、何やら沈殿物があるのを見つけてしまい萎えています。
最後になりましたが、読んでくださった方ありがとうございました。

## 第8話　あの人形に疑いを

「殺人事件があった日に、教室に殺人犯が来るなんて出来すぎてると思いませんか？」

何故だか分からないが、聖のその言葉はやけに頭に響いた。

「はは…。何言ってんだよ。犯人が来るのなんてあらかじめ分かるわけないだろ？」

俺は逆に質問してしまった。

「そうですね。少し整理しましょうか。」

聖は下駄箱にもたれかかった。少し長くなりそうだ。

「今日、枕谷先生から、殺人事件の事を聞きましたよね？」

「あぁ、聞いたな。」

「すぐ下校しろと言われたはずです。どうして、桐沢さんと教室に？」

桐沢とは亜門のことだ。

「すぐ大辻と帰ろうとしたんだが、駐輪場で鍵が無いのに気づいて教室に戻ったんだ。そうしたら、たまたま亜門がいて、たまたま、犯人が入って来たというわけだ。」

間違ってはおるまい。

「その話、おかしくないですか？」

いちいち、うるさい奴だ。最近の俺は『急』と『たまたま』が多いんだよ。

「いいですか？今日、僕が雪村君に忠告しましたよね？」

おそらく、朝の会話のことだろう。適当に相打ちをうっておく。

「失礼ですが、あれから雪村君を監視してたんですよ。一度も席を立っていませんよね？そして、鍵を落とした所も僕はみていません。」

「なるほど…。確かに、見落としがなく、お前が言っていることが本当ならば、俺はいつ鍵を無くせるんだ？」

何故だろう、だんだんと追い詰められている気がする。

てか、監視されていた事はスルーしている俺は偉いな。

話しているせいか、聖は目だけ笑っているようにみえた。

なんだか、中を見られている気がする目だ。

「鍵を無くせる時間は、つまり…。学校に到着して、僕が君の席に行くまでの時間と言うことです。そして、床に落としていたのなら、僕が気づきますし…。雪村君でも分かるでしょう？」

だんだんと嫌な気がしてくる。というか、そこまで来ると思い当たる節がある。

頭の中で何か、警告音が響く。

「じ、じゃぁ、いつだってんだよ！」

つい声を荒げてしまった。

「桐沢さん…。前の休憩に雪村君の席まで行ってますよね？」

体に悪寒が走るのが分かった。そうだ、さっきから感じていた感じはコレだったんだ。
否定しろ！頭の中で、何かが叫んだ。

「教室に着く前とか、駐輪場に行く間とかに落としたかもしれないだろ！？」
自分でも苦しいと思う。しかし、そうであって欲しかった。

聖は軽く頭を振るとつづけた。
「いや、それはないですよ。雪村君が一番分かってるんじゃないですか？」

聖の目だけが、異様に浮き上がって見えた。

確かに…。俺が教室に戻ったとき、亜門は俺の机の前にいた。
俺が戻ってくるのを分かっているかのように！

「鍵…探してるの？」と言った。
俺が戻ってきた理由が分かっているかのように！！

亜門が目の前にぶらさげた。
亜門が持っていたかのように！！！

「は、はははははははは。嘘だよな？」
心の中では叫びたかったが、口からは渇いた笑いしかでない。

「俺に何か話すために、鍵を取っておいたのならまだ分かるけど、犯人が来ることまでは分からないだろ！？」

「さぁ、そこまではチョット…。」
聖は、貼り付けた笑いに戻っていた。
嫌な汗が噴出したように、背中はじっとりと濡れていた。
「ただ…。」
聖は続けた。
「桐沢亜門には気をつけろ…。と言うことです。」
「あ、あぁ。そうだな。」
その一点だけは頷けた。
結局、真相は謎のままだ。のどの奥に魚の骨が刺さったような感覚が続いている。
その時、とっくに帰ったと思っていた女神が後ろを向いたまま立っているのに気がついた。
聞いていたのか？
「さて、そろそろ帰りましょう。もう、随分と暗くなってきてますしね。」
聖は、軽く言ったが、俺の気分は少しも晴れていなかった。
「女神さん。帰りましょうか？」
聖が歩き出した時、女神が振り返った。
「相良君。マタアシタ。」

## 第8話　あの人形に疑いを（後書き）

はい、こんにちは。天地　袋です。
今回は、どうでも良いことを、1話かけて解いています。
最近、あとがきは内容のこと書けばいいんだと気づきました。
最後になりましたが、読んでくださった方ありがとうございました。

## 第9話　安っぽい影絵　次話

秋の空は澄んで、いつもより高く感じられた。
金木犀がいつもの通学路を、金色に染める。

妹が小学生になって数ヶ月、俺達は毎朝一緒に登校していた。
妹は道路に広がった金木犀の花びらをさらに撒き散らしながら、小学校までの旅路を進行していた。

「くじら兄ちゃん。」

不意に妹がこちらを見上げた。

「どうした？ついに道路を著しく汚したことに気がついたのかね？」

「何いってんの？」
軽く流された。

「最近、蛍雪兄の帰り遅くない？」

相良蛍雪。俺の兄貴で高校生だ。

「ふふふ。野暮ったいぜ妹よ。」
俺はどうでも良かったが、不敵な笑みを浮かべた。

「兄貴も高校生。色恋沙汰の一つや二つ、あったって何らおかしく無いんだぜ？」

年上ぶるためにテレビの知識を並べあげたが、自分でもピンときていない。

妹は、よく分かってないようだったが、それで良いと思った。

※　※　※

学校の授業はまったく面白くない。
まったく分からないからだ。

本当に来年から中学生なのか、自分でも不安になる。

逃げるように家に帰っても、親父の修行が待っているし、俺の逃げ場は蛍雪兄ちゃんの部屋だけだ。
しかし、最後の頼みも、兄貴の帰宅時間がめっきり遅くなったがために、完璧に消滅してしまった。

兄貴がどこで何をしようが、俺には関係がないが少しおかしな点もあった。

弟の欲目かもしれないが、兄貴は俺と正反対の顔立ちで優しい顔をしている。それなりに整った方だと思う。
だけど、兄貴は彼女を作るタイプじゃないのは分かっていた。
いつも笑っているように見えるが、あれは今を見ていない目だ。
その内面だけは、俺と似ていたから俺には分かっていた。

もちろん、自分が子供なのは自覚しているから、俺のことも兄貴には筒抜けだろう。

ただ、違うのは、俺には見るものが無く。
兄貴には、見るものが有る。

ソレを理解している分、兄貴とは接しやすかった。
お互いの領域が分かっているから。

蛍雪…。兄貴は今。

何見てる？

## 第9話　安っぽい影絵　次話（後書き）

はい、こんにちは。天地　袋です。
次回の投稿は本編に戻る予定です。
最後になりましたが、読んでいただいた方ありがとうございました。

## 第１０話　何も知らない　前編

黒い景色に白い絵の具のようなものが落ちた。
ツーっとそれは下に垂れて白い線に変わっていく。
ボーっとそれを見ていると、白い線の部分が広くなっている。
鎌だ。
そう気付いた時には、俺の首に鎌が当てられていた。
「相良君…。待ってたのは、死んでもらおうと思ったから…。」
後ろだ。後ろに亜門がいる。
動くどころか少し声帯を震わせただけでも、俺の喉は裂けて鮮明な赤が黒の世界を包むだろう。
こちらは動かなくても、あちらが動くんだった。
鎌に力が入るのを感じた。
※　※　※
うわあああぁぁぁ！！！！
俺は、凄まじい倦怠感と疲労感に包まれていた。
体中、汗でベトベトする。
俺のベッドはもはや、床上浸水。

我ながら、細い神経だ。

「寝オチかよ…。」

ほとんどの人々の意見を代表するかのように、自ら声に出して言ってみた。

しかも、落ちきれてないじゃないか。

気分は優れないが、女神に「また明日ね」と微笑まれては行かざるを得ない。

しかし、桐沢亜門には注意しなければならないだろう。

いざとなれば、こちらには『黒蝶雪村』という日本刀がある。

その”いざ”が来ないのが一番良いのだ。

いざの時、俺は刀で亜門をどうしようと言うのだろうか。

自分でもこの発想は怖いと思った。

※　※　※

カラカラ…。

安っぽい音をたてて扉は開いた。

いつもと変わらぬ教室だ。

席に着く間、女神、聖、亜門の視線にさらされたが、女神が軽く手を振った事により、席に着いてからは、男達の”肩パン”にさらされてしまった。

左の肩が異様に痛いと思ってみると、大辻が絶えることなく拳を突

き出しているではないか。
軽く顔面に一撃入れて大辻を黙らせた。
こうしてみると、昨日、殺人犯と争ったのが嘘のようだな。
しかし、次の瞬間、俺の背筋が凍った。
「こんにちは。雪村君…。綺麗な朝ね…。」
第三次桐沢亜門襲来！

## 第１０話　何も知らない　前編（後書き）

はい、こんにちは。天地　袋です。
私は、話の書き出しに困ります。
だけど、気にしないフリをして、走り出します。
だから、すぐ迷子になります。
最後になりましたが、読んでいただいた方ありがとうございました。

## 第１１話　何も知らない　中篇

やばい、また急な展開だな。

「なんだよ？何かようか？」

少し、突き放すような言い方になったか。

さっきから俺は何故か、亜門の顔を見れずに下を向いていた。

「はめられたわね…。」

「はぁ？」

最近、俺の返事は変な声しか出ない。

てか、俺の方がお前にはめられたんじゃない？

「雪村君…。私が鍵…取ったと思ってない？」

いきなり確信を突かれ顔を上げた瞬間、亜門の顔が目の前にあった。

まさに、目と鼻の先というやつだ。

ドキッ心臓が跳ねた。

コレは、恋とかの類の胸の高揚などではない。

文字通り、心臓が跳ねたのだ。血管が切れたかと思うほどだ。

いや、実際、数本は切れたかもしんない。

しかし、人体の中は見えないし、見たくも無い。

人体の不思議展〔そういう展覧会〕なら、中学の時に見に行っただけで十分だ。

俺が何も言わないことを肯定ととったのか、亜門は話し出した。

「雪村君…。宗方から何か聞いてたよ…ね？」

息が顔に掛かる。

「アレ、信じちゃ…。ダメだよ…。」

亜門は、昨日の聖との会話を”アレ”と表現した。

こいつはつまり、昨日の話を聞いていたということだろう。

「お前の話なんか、信じられるかよ！この際、正直に言おう。俺は、お前を疑っている。」

勢いに任せて、突っ走り過ぎたようだ。

言ってしまった…。

「雪村君…。天使は嘘をつくものよ？」

ん？あぁ？

ははぁ、この期に及んでおとぼけ作戦に出たな。

分けの分からん妄想話に引きずり込んで、俺の正常な脳みそを容量オーバーさせる気だ。

そうは問屋（とんや）がおろすもんか！！

問屋というものが、どんな職業なのかは知らないが、とにかくここはそう言う場面だ。

「はっ。百歩譲ってそうだとして、天使が嘘つくかよ。お前は悪魔なんだろ？悪魔の言うことなんて信じられないね。」

まるで漫画のチョイ役のような言い方だが、内容はいい線行ってるはずだ。

この位の意地悪は神様も許してくれるはずだ。

俺が話を終わらせる為に放った言葉に、亜門は眉一つ動かさない。

「雪村君は、悪魔をどんなモノだと思っているの…？」

ふはは、いい質問だ。

「まず、先に矢印みたいなのが付いている尻尾がある。」

「無いわ。」

「しかも、背中には蝙蝠（こうもり）を思わせる羽があり」

「無いわ。」

「そして服装は全てを飲み込む黒！！」

「色んな服を着る。」

「そして、四六時中、身の丈ほどもある鎌を持ち歩き、子供たちを…。」

「それ…死神…。」

なんてこった！

この女は、人類が数百、数千年かけて完成させた悪魔のイメージを

全て否定したのか！？

「なんで、ソコまで言い切れるんだよ？」
この危険因子め。俺達の地球を渡すものか。

「あら…。前にも言わなかった？」
近い顔がよりいっそう、近づいた。

心臓が締め付けられる。
俺の死因はまちがいなく、心臓系の病だろう。

一拍おいて、亜門の唇が滑るように開いた。

だってほら…。私…悪魔だから…。

## 第１１話　何も知らない　中篇（後書き）

はい、こんにちは。天地　袋です。
結構、書いたつもりなのに全体の１０％もまだ書けていません。
もう、鼻水がでそうです。
最後になりましたが、読んでいただいた方ありがとうございました。

## 第12話　安っぽい影絵　三話

特にすることも無かったからテレビを見ていると、玄関のほうから声が聞こえた。

「ただいま～。」

「お帰り、蛍雪兄ちゃん。」

兄貴が元服して数ヶ月がたった今、俺も兄貴を呼ぶのに『蓮兄ちゃん』とは呼ばなくなっていた。

「ん？くじらか？ただいま～。」

兄貴は刀を右手でプラプラさせながら、部屋に入ってきた。

「今日は珍しく早いね～。何かあるの？」

実際、ここ最近の兄貴の帰宅時間で、今日が一番早い。

「今日は父さんが『龍鳴会』に呼ばれる日だろ？僕が変わりにくじらに稽古を付けろっていわれてるんだよ。」

そう言った兄貴は、楽しそうに笑った。

『龍鳴会』とは、近辺の家柄の良い人たちが定期的に開いている会で、その家々の頭首が参加する決まりになっている会合である。

仰々しい名前が付いているが、その内容はご近所さんの『囲碁の会』だ。

「親父、抜かりないな…。」

しかし、兄貴が帰ってくれたんだから、このままテレビを見ているわけにはいくまい。

「漆は？」

「母さんと、出てったよ～。買い物じゃない？」
兄貴が制服のボタンを外しながら聞いてきたので、適当に答えた。

※　※　※

「よし。基礎は終わりだ。適当に打ってきていいよ。」

基礎が終わっただけで、倒れこみたい俺に兄貴が声を掛けた。

兄貴とヤルのは久々だな。
親父との修行の成果を、見せつけてやろう。

兄貴は、ラフに刀〔木刀〕をプラプラさせている。

油断大敵だぜ！
「ぬぅおぉぉぉぉ！！」

咆哮一発！掛け声と共に兄貴に突っこむ。

スカッ。
兄貴は、横に流れるように避けた。

ちくしょう。笑ってやがる。

俺は、勢いを殺さぬまま突きを数発打ち込んだ。
最近、親父に教えてもらった技の一つだ。いきなりの実践投入だったが、うまくいったようだ。

カッ！カッ！カッ！カッ！カッ！！
兄貴が刀の柄（つか）の部分で全部受けた。
「くじら？お前、戦い方攻めタイプだっけ？」
相変わらず、笑いながら兄ちゃんが聞いてきた。
「わかんない。」
俺はとにかく打つしかない。
しかし、兄貴は本当に親父から教わったのかと思うほど、親父の剣には似ていない。
親父は構えただけで、相手を威嚇するような感じだが、兄貴のは何だか流れているというか、『柳に風』といった感じだ。
「自分の戦い方をまず見つけないと、何も始まんないよ？」
さっきから兄貴は後ろに回りこんでは、俺の頭にデコピンしている。
埒（らち）が明かない…。
基本に戻ろう。
距離をとって動きを止める。
相手に剣を構えて、剣先は喉元に…。
スッと何かが入ってきた気がした。
兄貴は、口元で少しわらった後、面白いものを見るような目をしていたが、少し様子が変わった。

プラプラさせていた刀を、右手から腕に這わすように刀を持つと、
肩先に先端を掛けた。

初めて相手にする構えが、自分の兄貴とはな。

ジリ…。ジリ…。

間合いを少しずつ詰めて行く。

ジリ…。ジリ…。ジリ…。

俺は、数年ぶりに見る兄貴の真顔を見て気が付いた。
あぁ、そうか…。兄貴は俺を見ていない。
俺の後ろに何か別のものを見てる。

何だかそれは酷く、悲しかった。

## 第１２話　安っぽい影絵　三話（後書き）

はい、こんにちは。天地　袋です。
本編では無い『安っぽい影絵』が所々入っていて
つまんねーよ！的な感じかもしれませんが耐えましょう。
私も耐えています。
最後になりましたが、読んで下さった方ありがとうございました。

## 第１３話　何も知らない　中、後篇

コイツハ何ヲ言ッテイルンダ！？

私…悪魔だから？
天使は嘘をつくものよ？

理解できない。てか、こいつはやっぱり頭が逝ってしまっている。
ヤバイ奴だ。

「まぁまぁ、桐沢さん。顔が近いですよ。」
いつの間に近くに来たのだろうか、聖が俺と亜門の間に手をかざした。

「宗方…。邪魔するな。」

「人が不審に思う前に、止めているだけなんですけどねぇ。」
聖は張り付いたような、目の細い笑顔のまま困ったような格好をした。

「だまれ…。いらない策まで用意したのは、お前の独断…なの…？」
亜門は、何か他の話をしている。

「フフ。仮に僕がくだらない策を練っていたら、どうします？」
貼り付けていたようだと思っていた聖の口元がいっそう”にんまり”と上がった。

この二人が会話をしている所は初めてみる。

「私が何もしないと思っているなら…それは、間違いだ。」
聖が亜門の耳元に顔を寄せて、小さく何かを言ったが距離が距離だけに俺にもその声は届いた。
「調子に乗るなよアクマノクセニ…。」
俺が驚いた瞬間。グイッと体が引っ張られた。
亜門が、俺の手を引いて走り出したのだ。
「ちょ！まっ、おい！離せってっ！」
何がなんだか分からない。
聖が張り付いた笑顔のままこちらを見ている。
急に引っ張られたから、刀が無い。
やべ、止まってくれ！
ぐえっ。
いきなり、今度は逆の方向に引っ張られた俺の体が不自然に止まった。
見ると逆の方の腕を女神が掴んでいる。
「二人とも、そろそろ授業の時間だよ？」
女神が軽く諭したが、亜門には届いていないようだ。
「離せ…。女神。殺されたい？」
「私も殺しちゃうよ？」

待て女神、冗談だと思ってるなら間違いだ。こいつはマジで言ってる。

女の子の口から、こんな言葉が出たことに俺は素直に驚いた。
どうやら俺は、女の子に幻想を抱くタイプらしい。

しかし、どちらかと言うと悪魔だと言っていた亜門の口から、『殺す』という直接的な表現を始めて聞いたことへの驚きの方が大きかった。

ダンッ！衝撃と共に、俺の席が吹き飛んだ。
聖が、物凄い形相でこちらに突っ込んで来るではないか。
聖の踏み込みの犠牲になったな…。俺の机…。

そう言われれば、昨日も犯人に女神が触られそうになっただけで、人格が豹変していたな。
俺が冷静に分析していると、女神が聖の胸を軽く押した。

若干、俺の手を持つ女神の力が緩まった気がする。

「うわっ！」

女神の力が弱まった瞬間、亜門の力が強まった。

今日も快晴。亜門に手を引かれたまま、暑い廊下に走り出した。

## 第１３話　何も知らない　中、後篇（後書き）

はい、こんにちは。天地　袋です。
この話は、現代ファンタジーのようでもあり、ギャグ路線でもなく。
かといって、感動的でもなく、ましてや、純文学でもありません。
たぶんコレを暇つぶし文学と言うのだと思います。
最後になりましたが、読んでくださった方ありがとうございました。

## 第１４話　何も知らない　後篇

「ちょ！あ、まっ！わっ！落ち着けって。おぃ！」

亜門はずいずい、俺の手を引いて歩いていく。

俺はグラグラ動く視界の端で大辻の存在に気づいた。

「大辻！刀、うわっ！俺の刀！持ってっ！ちょ！」

大辻は俺の願いよりも、亜門と俺が手を繋いでいることに驚いていた。

「こんちくしょー！お前の刀なんか、バキバキに折ってやるぅぅぅ！！」

大辻はハンカチでも噛みそうな顔で叫んでいる。

ダメだ、この馬鹿。

早く何とかしないと…。

俺は学内を引きずり回されて、ついに屋上にたどり着いた。

肩で息をしている俺とは対照的に、亜門は汗一つかいていない。

「なんなんだよ。急に連れ出しやがって…。」

「教室だと邪魔がはいるから…。」

「授業。始まっちまったぞ…。」

「私のこと…どこまで知ってる？」
この女いつも通りだが、俺の話は全く聞いていない。
「転入生、桐沢亜門。性別は女。自分を悪魔だと言う虚言癖および妄想癖あり。」
俺が知っている情報はこれだけだ。
一部の男子から絶大な人気があるとか、そういう情報は公開しなくてもいいだろう。
「昔…何年も前に、私の事聞いてない…？」
「はぁ？お前、この学校に来て初めて俺に会ったんだぞ？」
「そうね。」
ついに壊れたか。
だが亜門はまっすぐ俺の目を見ている。
「聞いてないよ…。お前のことは、何もしらない…。」
すると亜門は、嬉しそうな悲しそうな顔をした。
このとき俺は、亜門は女の子として悲しいくらい綺麗だなと思った。
「これでも貴方は何も知らない…？」
！？
次の瞬間、俺は自分の目を疑った。
亜門の右手が無いじゃないか！？

いや、空間の中に埋没している。

亜門を飲み込んだ部分の空間は、まるで水面のようにゆらゆらと揺れている。

バシャン！

空間が水飛沫（みずしぶき）を上げながら、中から三又の槍が飛び出した。

自分の身長より高い槍を亜門が持ったときに、俺は亜門の言葉を思い出した。

悪魔をどんなモノだと思ってるの？

「あぁ、鎌じゃなかった…。悪魔は三又の槍を持っている。」

亜門は表情を崩さず口を開く。

そして、ポツリと言ったんだ。

「正解。」

## 第１４話　何も知らない　後篇（後書き）

はい、こんにちは。天地　袋です。
初期のポケモン１５１匹が並んでいるパズルを発掘し、喜び跳ねています。
最後になりましたが、読んでいただいた方ありがとうございました。

## 第１５話　壊れた分岐

亜門は槍を杖代わりに付くと、槍にもたれ掛かった。

「はじめまして。桐沢亜門。悪魔です。」

数ヶ月前に聞いたことのある言葉を発し、亜門はまっすぐに俺を見ている。

どうやら、槍でどうこうする訳ではなさそうだが、注意は必要だ。

だが、ここまで来ると俺も信じざるを得ない。

「お前…。本当に悪魔だったのか？」

もはや、悪魔と言うものの存在を認めるしかない。

「今まで信じていなかった…の？」

亜門も逆に驚いたようだが、簡単に悪魔の存在を認めるのは容易ではない事を分かって欲しい。

「私の言ってることは全て本当なのよ…。」

「はは…。それは、悪いことをしたな。」

俺の空の手が刀を探すが、教室において来たことを瞬時に思い出すと背筋が凍った。

「この際だから、全て話すわ…。だから、貴方も理解して…ね？」

亜門の話だと、聖も本当に天使らしい。

そして、悪魔と天使は相容れない関係らしい。この点に関して言えば、俺の思っている関係と一致している。

しかし、それは不自然に思えた。

「こんなに都合良く、天使と悪魔が同じ場所に集まるのか？てか、人間の世界に来る必要が分からんぞ？」

「あら…。天使も悪魔も同じ世界で生きているのよ？何もおかしい事はないわ…。雪村君…。この世界はね…。おかしいと思うと不思議で、普通だと思えばいたって普通なのよ…。」

この世界。俺が１６年間生きてきたこの世界のことだろうか？思えば普通で、思えば不思議だったのかもしれない。

「雪村君…。女神も…神…よ？」

屋上に強い風が吹いた。俺のこれまでの常識を吹き飛ばし、俺の中で何かが目をあけた。

肩下まであるの亜門の髪が波打ち、俺は風の形を見た。

フェンスの向こうの見慣れた景色が、色を変えた。

「天使は人を騙し、神は人で遊ぶ。神は救う者ではないわ。だって、存在してるのに誰も助けないでしょ？」

確かに、神はいないと思っていた理由は、救ってくれないからだった。

「天使は人を騙し、神は人で遊んだら、悪魔は何をするんだよ？」

自分でも驚くほど落ち着いていた。

「悪魔は、何するんだろうね…。」
亜門は自嘲気味に笑った。

「私は…。普通に生きたいだけ…。その為には天使とか神が邪魔なの…。」
亜門の目に炎が灯るのをみた。

「俺に…、俺はどうすればいい…？」

風の中で、亜門の表情の無い顔に悲しい笑顔がさした。
それは、一瞬で、ほんの僅かで、微かな笑顔。

「一緒に戦ってくれない…？」

「あぁ。分かった…。」

この時、俺の中にある亜門への恐怖心とかは不思議と消えていた。
ただ、なんとなく亜門は一人にしてはいけないと……思ったんだ。

好きとか、恋とかじゃない。
ただ、なんとなくそう思ったんだ。

## 第１５話　壊れた分岐（後書き）

はい、こんにちは。天地　袋です。
ごめんなさい、引越しのせいで更新遅れました。
内容は少々、強引な気もしますが、本編ではない部分で補足されるはずです。
最後になりましたが、呼んでいただいた方ありがとうございました。

## 第１６話　廃村の夜に　一夜

私がこの手記を手にしたのは、息子が死んで…正確には失踪して５年ほどたった夏の終わりの頃だった。

「息子が遺書で、自分が死んだらこの手帳を相良のお宅に届けてくれと…。」

私が玄関を開けると、対馬家の奥さんが立っていた。震える手には、ボロボロになった手帳が握られている。

「それでは、流君は…。」

私は息子の友達の対馬流君（つしまながれ）を知っていた。対馬君の母親、つまり目の前にいる女性とは幼い頃からの付き合いだからだ。

「お上がりなさい」と声を掛けたが、用事があると言うと彼女は深々と頭を下げて帰ってしまった。

いつしか変わってしまった関係を、咳払いでごまかし手帳をめくった。

※　※　※

相良のおじさんへ

　おじさんがこの手帳を手にした時、僕はもう生きてはいないと思います。

本来ならばこの手帳に記載されている内容は、お見せするようなも

のではないのでしょう。
おそらく蛍雪も、自分が、自分たちがしてきた事を誰にも話していないと思います。
しかし、おじさんには蛍雪のしてきた事を伝えようと思い、筆を手にしています。

この手帳は、蛍雪に聞いたこと、僕が見たことを記載しています。
よって、事実と異なる部分があるかもしれませんが、これが僕の知る相良蛍雪です。

※　※　※

これが彼女との出会いだった。

人ごみを避けて裏道を通学していると、3人くらいの男たちの中に背中まである長い黒髪の女の子がいるのに気づいた。

そのまま横を通った時に男たちの会話が聞こえた。

「なぁ、いいだろ？」
「おじさん等と遊ぼうよ～。」

どうやら様子がおかしい。
と言うよりも、何と言うありがちな冒頭なんだ。
男たちの中でその表情までは見れないが、ここは助けるべきだろう。

「おじさん達何してるの？」

3人ともが面倒臭そうにこちらを振り返ったが、こっちが子供だと分かるとゲラゲラと笑った。

「高校生は勉強してな。」「女の子助けてカッコつけようってかぁ？」

口々に浴びせられる罵声だが、そんなことよりも相手の腰のモノが気になった。

刀？

男達は白い鞘（さや）を腰にさしていた。

白い鞘？零舞（れいぶ）の関係者か？

しかし、そんな事よりも刀の携帯を許可されているほどの男が、何て低俗な事をしているんだ。

刀への視線に気づいたのか、男の一人が刀に手を触れた。

「この糞ガキ、怪我したくなかったら、さっさと消えろよ」

男達はゲラゲラと不快な笑い声を上げながら、初めから逃がす気は無かったのか、周りをゆっくりと歩き出した。

囲まれたか…。ここは一つ”カマ”を掛けてみよう。

思うや、いっきに腰を落として『蛍雪』を抜く構えをとった。

男達は僕も刀を持っていることに始めて気づいて一瞬うろたえたが、それでも自分たちが優位だと思ったのか薄ら笑いを浮かべている。

僕ならうまくやれるはずだ…。

「良いの？おじさん達…。斬っちゃうよ？」

僕は刀を5センチほど抜いた。
キーン…。
刀を抜く音に、光が反射して手元が光る。
「ちょっと…。ま、待てよ。ほんの冗談だろ？な、なぁ？」
「あ、あ、あたりまえだろ？嫌だなぁ。」
お約束通り。
男達は掌を返したかのように、態度を変えるとヘラヘラ顔で後ずさりをしている。
あと、一歩だ。
「行けよ…。あれ？俺は行けって言ったんだけど？」
男達は、訳の分からない事を口走りながら一目散に逃げ出した。
”カマ”大成功。
本来、抜刀許可者はほとんど居ないんだ。
「大丈夫？」
刀を鞘に戻すと残った女の子に声を掛けた。
高校生だろうか、予想通り僕と同じくらいの歳にみえる。
透き通るほど白い肌に、真っ黒な髪。
僕はこれはど綺麗な子を今まで見たことが無かった。
それはなんだか神聖なモノに見えた。
「大丈夫…。」
ポツリと搾り出すように、声が聞こえた。

「貴方…。刀抜ける…の？」

見られたか…。

「あはは、ホントは駄目なんだよ。でも、刀にセンサーが付いてる訳じゃないし、人も居ないからね。そうそう、分かるものじゃないんだ。」

（まぁ、自論だけどね。）

「そう…。誰にも言わないわ…。」

女の子は大して興味なさそうに横を向いた。

長い髪が風になびくと、フワッと女の子の匂いがした。

一瞬、我を忘れていたから、取り繕うように口を開いた。

「えと、僕は相良蛍雪。君の名前は？」

女の子がスッと、目をこちらに向けるとまたポツリと言ったんだ。

「名前？私の名前は…桐沢亜門…。」

## 第１６話　廃村の夜に　一夜（後書き）

はい、こんにちは。天地袋です。
引越しやら、パソコン故障やら、猫のフンを踏むやらで更新できてませんでした。
不幸すぎますが、全部本当です。悲しいですね。この野郎。
最後になりましたが、読んでいただいた方ありがとうございました。

## 第17話　止まり木

ゆっくりと、街が茜色に染まっていくのを見ながら、俺はドッポをかじった。

パキッ！

心地よい音がする。

「平和だ…。」

亜門が悪魔だと確信した日から、すでに数日が経過していたが俺の身辺に何の変化もない。

亜門も、別に何も言って来ないし、宗方は相変わらず張り付いたような笑顔を浮かべているので何を考えているのか分からない。

あぁ、そうだ女神もこれと言って接点は無く、ましてや、殺人犯に遭遇することも無かった。

つまり、俺はすこぶる平和だということだ。

というか、先週のことは全て嘘だったのではないか？と言うような自己防衛の発想までしてきている。

まぁ、何も無いことに越したことは無い。

明日は休みだから、昼まで寝て、買い物にでも出かけよう。

「とまぁ、ここはテストに出る可能性がある気がするぞ～。」

枕谷が、回りくどい言い方をしたのと同時に、授業の終わりを告げる鐘が鳴った。

またまた、それと同時に後ろに気配を感じた。

「で？亜門何のようなんだ？」

「あら…。よく、分かったわね…。」

と、気の無い返事をすると亜門は、続け出した。

「明日、朝9時に相模秦野（さがみはだの）駅に集合ね…。」

「ほう、それは残念だな。丁度その時間は、予定が入ってるんだ。」

さっき、昼まで寝ると決めたからな。

「そう…。じゃぁ…私が8時に貴方を起こしに行くわ…。」

「駅に9時でいいんだな？」

コクンとうなずくと、亜門は満足そうに戻っていった。

「いやいや、いい天気ですね。嫌になるくらいに。」

入れ替わるように宗方が、覗き込んでくる。

「俺には曇っているようにしか見えないがな。」

「あら？そうですか？」

そんなことはあまり関係が無いように、宗方はククッと笑った。

「そうだ。雪村君。明日、暇ですか？」

「ほう、それは残念だな。丁度、明日は予定が入ってるんだ。」

「へぇ、本当に？」

宗方が細い目を、チラットと開けた。

「ふむ…。やはり…明…死…がで…そこなら、あるいは…。」

なにやらブツブツ言いながら、宗方は教室を出ていった。

何なんだ、あいつは？

とにかく、家に帰ろう…。

## 第17話　止まり木（後書き）

こんにちは。天地袋です。
いやぁ、しばらく書いて無かったですね。
すみません…。
最後になりましたが、読んでいただいた方ありがとうございました。

## 第１８話　忘れた雪は二度降る　前編

俺は馬鹿か？

駅前にたたずむ俺は、人ごみの中で少し冷静になっていた。

『一緒に戦って欲しい…。』って言われたくらいで、二つ返事でＯＫを出すのか？

女神と宗方を、神と天使だと認めたとして、常識的に考えて、いや…、すでに常識的ではないのだが…。

とにかく、神と天使だとする。

普通の人間が、どうやって神や天使と戦えるのだろう？

まさか、亜門は神クラスの化け物を相手に、日本刀を振り回せと言っているのだろうか？

「狂っている…。」

今までは頼もしく見えた『黒蝶雪村』が、急に貧弱に見えた。

中央改札からは、絶え間なく人が出てきているが、亜門の姿は全く無い。

「もう、９時過ぎてるよな？」

俺が時計に目をやると、後ろから知った声がした。

「おや？雪村君じゃないですか～。」

こんな偶然があるのだろうか？そこには、宗方が張り付いた笑顔で立っているではないか。

「宗方？おまえ、何でここに？」

「いや～。奇遇ですねぇ。桐沢さん来てないでしょう？」

宗方は俺の問いには答えず、亜門の名前を切り出した。

「お前、何で俺が亜門と会うの知ってるんだ？てか、なんで来てない事をお前が知っている？」

こいつは何か変な気がする。すぐ抜けるように刀を、後ろに下げよう。

「えぇ、桐沢さんと会うのは、学校で聞いてしまいましてねぇ。来てない事ですが、さっき桐沢さんに会ったので不審に思ったんですよ。」

そう言って、宗方はニンマリと笑った。

「亜門に会った？あいつ、何で来ないんだ？」

「えぇ、それなんですが待ち合わせ場所を変えたいとかナントカで…。伝えてくれと頼まれまして…。」

「はぁ？あいつ何も言ってないぞ？携帯の番号聞いとくべきだったな。」

「あはは、女の子と会うときは基本ですよそれ。ほら、女心とナントやらってね。」

宗方はククッと笑うと、また口を開いた。

「ほら、案内しますよ。あぁ、出口が違いますね。南口から出た方が近いですよ。」

俺は、宗方に促されて駅を出ることにした。

南口方面は昔ながらの商店街が並ぶ、細い路地が何本もある通りだ。

宗方はズンズンと、進んでいくが全く振り向こうともしない。

いつしか俺は、来たことも無い通りに来ていた。

## 第１８話　忘れた雪は二度降る　前編（後書き）

こんにちは、天地袋です。
今日は１月１日です。
あけまして、おめでとうございます！
最後になりましたが、読んでくださった方ありがとうございました。

## 第１９話　忘れた雪は二度降る　中篇

細い路地を、ニヤケ顔の宗方と歩く状況がイマイチ分からない。
ただ、無心で歩くのも退屈だし、少し整理しよう。
亜門は悪魔。宗方は天使。女神は神。
この三点を事実だとすれば、今までの話もつながってくるかもしれない。
いや、最近、盲目的に全てを信じているが本当に大丈夫なのか？
とにかく落ち着いて整理しよう。
亜門の言葉で言うなら、「天使は人を騙し、神は人で遊ぶ。」
悪魔は、何をするか分からない。

この言葉を冷静に考えれば、天使にも、神にも役割があるのに対し、悪魔には役割が無い。
だが、悪魔が生きるのに、天使と神が邪魔になるとも言っていた。
これは、つじつまが合っていないじゃないか！？
俺は自分の考えに驚愕した。
生きるのに邪魔ということは、天使、神が、悪魔の役割を侵害して邪魔になっているはずだ。
とすれば、悪魔にも役割がある。

『天使は人を騙し、神は人で遊ぶ。』
これに共通しているのは『人』だ…。
つまり悪魔も『人』に何らかのアクションを起こすものということ

だ。

この場合の『人』は…。

相良雪村…。俺だ…。

頭がグルグルと、とぐろを巻く感覚に襲われる。

亜門は俺に嘘をついている…？

クッ…。落ち着け…。考えるんだ。

なぜ今まで気づかなかったのか、思い返せば他にもあるはずだ。

「昔…何年も前に、私の事聞いてない…？」

確か、こんな事も言われた気がする。

何年も前に聞いた事があるというが、亜門は数ヶ月前に転入してきたばかりだ。

そんな昔の事で何かあるとすれば、あの、『相良蛍雪』に関わる事くらいだ。

グッと手に力が入る。

聞いた事があるか？という事は、聞かせてくれる相手が亜門を知っている事になる。

あの男が居なくなったのは何年も前で、亜門とあの男に接点があるようには思えない。

これは、分からないワードだ。

保留。

他にも引っかかるところは多々ある気がする。

いつかの殺人犯の一件で、女神達が現れたタイミングと発言も、今思えば違って聞こえてくる。
宗方にいたっては、俺の行く先で会っているきがする…。
監視…されてるのか…??

亜門も俺に嘘をついていた。だが、天使と神なのに、この2人もなんだか怪しい。
俺はどっちを信じたらいいのだろう?
むしろ信じたら駄目じゃないか?

とにかく表面的事実で、俺に分かるのは、亜門は、宗方、女神と仲が悪いという事だ。

待てよ?とすると何か引っかかるな。
何で俺は、宗方と歩いてるんだ?

確か、宗方が言ってた言葉は、
「いや~。奇遇ですねぇ。桐沢さん来てないでしょう?」
この発言は、違和感があるが意図が読めないな…。

「えぇ、それなんですが待ち合わせ場所を変えたいとかナントカで…。伝えてくれと頼まれまして…。」

これだ!!

そもそも、アレだけ毛嫌いしている宗方に、亜門が頼みごとなどするのか!?
亜門が9時に待ち合わせを指定して、それに遅れた。
そこに、宗方が現れただけで、十分おかしいじゃないか!?

俺は馬鹿か？なんで気づかない！？

ポツポツと歩く宗方が急に恐ろしく見えた。奥歯がガチガチなる。

「む…宗方…？いつまで歩くんだよ…？もう結構たつだろ？待ち合わせ場所ってどこだよ？」

焦って質問ばかりになってしまった。

クルっと薄い笑顔が振り返ると、「ん～」と全く考えていない顔で考えている様な声をだした。

「ん～、どっちでもいいですよ？」

意味の分からない返答と、張り付いた笑顔が俺を見た。

## 第１９話　忘れた雪は二度降る　中篇（後書き）

こんにちは、天地袋です。
ネタを忘れそうだから急いで、ズラズラ書いてます。
いずれ、全部綺麗にしたい…。
最後になりましたが、読んでくださった方ありがとうございました。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5463c/

日替わり３５℃！！

2010年11月23日02時36分発行